

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	立命館大学	
取組学部・研究科等名	文学部・文学研究科	
構想名称	東アジア次世代人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営トライアングルキャンパス	
海外の相手大学	【中国】	広東外語外貿大学東方語言文化学院
	【韓国】	東西大学校外国語学部

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

「キャンパス・アジア」モニタリング報告書について

「キャンパス・アジア」のモニタリングは、日中韓質保証機関協議会*¹が実施するプロジェクトで、「キャンパス・アジア」パイロットプログラム*²をケース・スタディとして取り上げ、プログラムの優良事例を抽出しながら、国際的に連携した教育を展開するうえで「保証すべき質」についてより明確にし、3か国間で共通の質保証機関のガイドラインを作成することを目指しています。

モニタリングでは、プログラムの最低限の質を確認するような評価ではなく、国際的に連携したプログラムの現状や質向上にかかる活動を把握・確認し、**教育の質の観点から優良事例を抽出して、それらを国内外に広く発信していくことを目的**としています。

「キャンパス・アジア」パイロットプログラムは、2011年に開始され、5年間のプログラムとして採択されています。その間において、日中韓質保証機関協議会は、モニタリングを2回実施することとしています。1回目のモニタリングは、日中韓各国における関連法規や評価制度・手法を踏まえて、各国が個別に実施することとしました。

パイロットプログラムの取組みは今年度で3年目を迎え、交流の動きも本格化しています。1回目のモニタリングでは、機構の「キャンパス・アジア」モニタリング委員会が定めたモニタリングの基準に基づき、各プログラム実施主体が平成24年度末までの取組みについて自己分析を行いました。この自己分析書に対して書面調査を行うとともに、訪問調査を通じて今年度（平成25年度）までの取組状況を聴取しました。

本報告書は、そのモニタリング結果をまとめたものです。なお、**優れた取組みの抽出**にあたっては、当該大学の自己分析書の文章をもとにし、説明に際して最低限必要な修正を加えました。

さらに、プログラムの今後一層の進展に資するため、**大学から今後の課題点を記載していただき、それに対するモニタリング実施側からのコメントを付記**して、本報告書に掲載しました。なお、このコメントは、モニタリング委員・専門委員の立場からのもので、モニタリング委員会全体の意見を代表するものではありません。

※本報告書の形式について

基準1から4の各基準毎に、「取組みの特徴」の後に、「抽出した優れた取組み」を枠内（）に示し、その理由を付しています。

なお、本報告書の電子版およびモニタリングの基準やプロセスをまとめた『「キャンパス・アジア」モニタリングハンドブック』の電子版は、大学評価・学位授与機構ウェブサイト（http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/jckcouncil/campusasia_monitoring.html）をご覧ください。

*1：大学評価・学位授与機構、中国教育部高等教育教学評価センター（HEEC）、韓国大学教育協議会（KCUE）の3つの質保証機関から構成。

*2：平成23年度大学の世界展開力強化事業タイプA－I：日中韓のトライアングル交流事業として採択された10のプログラム

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	5
	基準 2－2 教育内容・方法	7
	基準 2－3 学習・生活支援	9
	基準 2－4 単位互換・成績評価	12
	基準 3 学習成果	15
	基準 4 内部質保証システム	18

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

「東アジア次世代人文学リーダー」の育成を目標に定め、その実現のために日中韓の学部学生がキャンパスを共に移動し生活する「移動キャンパス」方式を実施しており、目的の設定・共有が優れて進展している。

3大学間では協議組織や支援 IT ツールが構築され、学内の支援・協力体制も機能しており、体制構築についても優れて進展している。教育内容・方法では、プログラム専用の授業を新規に開発し、一貫したカリキュラム内容となっており、進展している。移動キャンパスでの学生サポート体制や、共同シラバスの作成、ラーニングアグリメントの発行、統一した Web 履修管理システムの構築、共同学生宿舎（シェアハウス）の整備など、学習・生活支援について優れて進展している。単位互換については、科目認定の事前調整、補講による授業時間数の調整など単位互換・成績評価の方法の構築が行われており、進展している。

学習成果の測定については、国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなどに関する到達度アンケートを3か国で共同開発して実施しており、取り組みが優れて進展している。

優れた取組み

- ・ 日本・韓国・中国での教育・生活を実際に3か国で同じ期間おこなう「移動キャンパス」により、3か国の学生が一つの集団となり、ともに学び・生活し、互いにサポートしあう取り組みを行っている。
- ・ 運営に関わる諸事項の討議体として「三大学教職員合同会議」を各国持ち回りで実施し、さらに、遠隔システム等の IT ツールを利用した「実務者会議」で日常的な連絡を行っている。
- ・ プログラムマネージャーとしての日本人教員と外国人教員2人を採用し、留学生活におけるリスク管理などにも注意を払っている。また、教育開発支援課の協力による学生到達度アンケートの実施など、学内の各種部署による支援・連携体制が構築されている。
- ・ 本プログラムのために3大学で新たに授業を開発しており、一貫したカリキュラムとなっている。3大学では語学授業と人文系演習授業の割合を統一する調整も行っている。移動キャンパス前には、学生の現地適応力強化に向けた教育を行っている。
- ・ 「学生共同宿舎」（シェアハウス）を借り上げ、日韓中の学生が共同学習・共同生活を行うことで相互理解を深めている。
- ・ 3大学は共同のシラバスを作成し、ラーニングアグリメント「プログラムの手引き」を発行している。
- ・ 他大学で履修した科目を出身大学の語学科目や専門科目として認定できるように事前の調整を行っている。また、出身大学で適切な単位認定ができるように補講の実施も含めた授業時間数等の調整も行っている。
- ・ 日韓中の3か国語に対応した Web 履修管理システムによって、学生がどの国にいても履修登録や、開講大学での成績評価を直接参照できる。
- ・ 国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなど包括的な学生の到達度を定則的にはかるため、到達度アンケートを共同開発し、中国語・韓国語に翻訳して3か国同時に実施している。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

「東アジア次世代人文学リーダー」として目標とする人材像を明快に定めており、それがプログラム全体を背骨として貫いている。日中韓の学部学生がそれぞれのキャンパスを共に移動し生活する「移動キャンパス」は、この人材像に沿った優れた教育実践の枠組みとなっているとともに、東アジアのさまざまな大学で運用できる国際教育プログラムのモデル形成という目的にも即した新たな試みである。移動キャンパス構想について3大学が考え方や方法を共有しており、その実現に協働している。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本キャンパス・アジアプログラムに関して、平成24年6月に3大学で国際交流協定書を交わし、プログラムの目的を「東アジア次世代人文学リーダー養成」と定め、プログラム内容を一致協力して運営することを正式に締結した。

(優れている理由)

3大学間で正式な協定書を締結し、その中でプログラムの目的を明確に定めるとともに、カリキュラム構築等の内容について合意し、共同で運営することを定めていることは、目的の共有や共同運営のために優れている。

大学4年間で修了する学部学生のためのプログラム。東アジアのさまざまな大学で運用できる国際教育プログラムのモデル形成を目指している。

(優れている理由)

目的として、3大学間のみならず、東アジア全般の大学でも運用できるプログラムのモデルを構築することを目指している点は、積極的な取り組みであり優れている。実際に、3か国の学生がシェアハウス等で共同して生活・学習する方式、3か国を国際移動する「移動キャンパス」方式、外国語を学習して原書で人文学の文献を読める力を育成する学習内容がモデルとして開発されている。また、学部課程全般にわたるプログラムであることも望ましい。

語学・専門知識・コミュニケーション能力の3つの能力をバランスよく修得するプログラムである。これまでの国際教育は、語学中心（語学だけ）、研究中心（研究だけ）という偏りがあって当然であったが、東アジア関係の発展と複雑化の中で上記の3つの基本的能力を備えた人材が要請されており、新しい時代の期待に応える人材を育成する。

(優れている理由)

これまでの国際教育の語学や研究中心への偏りを是正しようという目的を設定している点は優れている。実際に、教育方法の面でも、PBL 型、アクション型（フィールドワーク）を増やし、プレゼンテーション能力を高めている。これらの演習を通じて、相手側の文化をきちんと理解し、コミュニケーション（会話）をリードする力を高める努力をしている。また、各大学が有している科目を活用しながらキャンパス・アジア向けに開講しており、3大学で議論を重ねながら歴史や文学の共同開講科目の開発に取り組んでいる。

日本・韓国・中国での教育・生活を実際に3カ国で同じ期間（10週間ずつ）おこなう「移動キャンパス」であり、例えば、日本国内にいて中国や韓国のことを学ぶドメスティックな机上の学問ではなく、現地で、現地の言葉で、現地の文化・歴史・社会を学ぶことができる。3か国の学生が一つの集団となり、3大学のキャンパスをめぐりながら、ともに学び・生活し、互いにサポートしあう。実践的で生きた人文学の知識を持つとともに、国際的な協力関係に直結するような、これまでにない深い信頼関係、友情関係を持つ、「次世代の人文学リーダー」を育成している。

(優れている理由)

「移動キャンパス」の仕組みによって、生活する中で相互理解を深めるという考えは優れている。学生間の人脈形成を促し、将来の人材ネットワーク形成に大きな貢献をする点で、他のプログラムにあまり例のない、優れた取り組みである。キャンパス・アジアが描く学生のモビリティ（大学間交流）の姿を具現化する一つの挑戦的な試みであり、これを実現させた実績は特に優れている。また、学生の語学能力不足の恐れに対して、日本人の教員の講義に中韓のネイティブの教員に通訳として入ってもらうこと、日本人教員を中韓の大学の授業の補佐役として派遣することなどの工夫を行っている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 平成15年以降の経験に基づき今回の計画が構築されており、成功に導く要因の一つとなっている。
- ・ 従来の共同運営事業をさらに発展させる形で、プログラムが作られており、3大学で共通認識があることは、当該プログラムの強みとなっており、成果が大いに期待される。
- ・ 「移動キャンパス」の実施は、多くの課題を克服しながらの実験と言う点で、特に際立った取り組みと言える。3か国の学生の言語能力は、プログラムの実施に当たり、つねに問題となると思われるところから、その対応は語学研修の充実に加えて、さまざまな対策が必要となるであろう。それに対する工夫を引き続き検討されたい。
- ・ こうした人材像を敢えて「人文学リーダー」と捉える視点について、より詳しい説明があれば、人材像はさらに具体的になると思われる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本学では、24年度の文学部新生を主な対象として本プログラムに関する説明会とオリエンテーションをそれぞれ複数回行った。そして同年8月には「移動キャンパス」の事前体験として、日韓中を1週間ずつ移動するオリエンテーションショートステイを実施した。

しかし、ショートステイの最中から深刻化しつつあった日韓中の政治的な問題は、今にいたるまで東アジアにおける緊張を高める状況になっている。このような状況は日本人学生の本プログラムへの参加意欲に影響を与え、説明会、オリエンテーションから11月の学生選抜まで参加希望者が激減する事態もあった。

将来、本事業の長期的かつ安定的な推進策を考えるにあたり、東アジア国際関係や政治状況におけるこのような不安定さに影響されることのない体制作りが課題である。

本プログラムを共同運営する広東外語外貿大学、東西大学と本学は、過去10年以上にわたる共同授業運営の経験をもち、活発な教職員交流を行ってきた。その経験と交流の実績は本プログラムの運営におけるもっとも重要な財産となっている。

本プログラムの運営においては、3カ国の大学制度の相違をどれだけ調整しつつ協力できるのかがポイントとなっており、今後も参加大学の教職員間の協力、信頼関係の強化と維持が求められる。

○コメント

- ・ 国際関係や政治状況は大学がコントロールできるものではなく、そのような外からの変化に強い仕組みを作って頂きたい。これまでの経験の蓄積が、これらの問題の解決を促進することを期待したい。
- ・ 事前研修やショートステイは、学生のモチベーションの向上や語学力の準備などに有効だが、日中韓の政治的環境は、今後も長期にわたる緊張が想定される。従来のような友好的な雰囲気や経済的な結びつきを強調するだけでは、学生の交流へのモチベーションを期待できないことは、十分に予想される。対立を含みつつ、利益共同体としてネゴシエーションを行っていくのは、ある意味で「普通の国家関係」であり、プログラム参加学生への動機づけにも、状況の変化に応じた新たな工夫が必要であろう。これには体制作りだけでなく、理論構築も含まれると思われる。
- ・ 政治等の外部要因に影響されることのないよう、学生への意識付け等が重要であるとの認識はその通りだと思う。
- ・ 魅力ある卓越したプログラムの構築が重要である。長年の3大学間の交流・連携実績及び目標の共通認識に基づき、さらに体制強化を図られたい。
- ・ 日中韓の大学間の調整は、じつに多岐にわたり、その苦労は想像にあまりあるものがある。現場の教職員間の協力と信頼関係の強化と維持は、人脈の重要性から言っても重要であるが、大学や学部の長の定期的な会合も重要となろう。相手大学の長に公的な場でつねに態度表明しておいてもらうのは、効果的と思われる。

基準 2 教育の実施**基準 2－1 実施体制**

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

3大学間での協議組織や日常的な連絡を取り合う実務者組織の体制が構築されていることに加え、メーリングリストや遠隔会議などの業務進捗管理や協議のためのツールが運用されており、情報共有、連絡調整の体制が十分整っている。また、学内での教職協働での役割の組織化などにより、学内の支援・協力体制も機能しているように見受けられる。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

協定書を締結し、運営に関わる諸事項の討議体として「三大学教職員合同会議」を各国持ち回りで実施することになった。また、「三大学教職員合同会議」の円滑な実施のために、遠隔システムを利用した「実務者会議」を設け、議題事項の打ち合わせを行っている。「合同会議」の役割を以下のような事項の協議・調整の場と位置付けた。

- ・ 人材育成目標に関する意見交換、目標共有
- ・ カリキュラム、成績基準、単位認定等に関する調整、協議
- ・ プログラム運営、学生支援等にかかわる情報共有、必要な事項の協議

(優れている理由)

目標の共有など、プログラムの改善を行う体制的な仕組みと、日常の連絡を行う仕組みを分けて明確に位置付けているところは他大学の参考になる優れた取り組みである。特に、学生が移動し合う移動キャンパスの取り組みにおいては、リスク管理などの点からも日常的なコミュニケーションの体制構築が不可欠だと思われる。「三大学教職員合同会議」を各国持ち回りで開催する形で設けたのは、お互いの事情を理解し、解決策を調整する上でも効果的である。また、会議での協議事項を明確にしていることは優れている。

日常的な情報交換を可能にするため、以下のように多様なツールを運用している。

- ①三大学間メーリングリスト：三大学内における業務メーリングリストと三大学共同のメーリングリストを活用して日常的に業務進捗の状況を把握
- ②Web ストレージ「eRoom」：あらゆる書類、情報、データなどを三大学が Web 上で共同運営、管理できるシステムを構築。
- ③遠隔システム：緊急な課題の解決も含め、常に三大学が遠隔システムで会議できる仕組み。

(優れている理由)

日常の情報交換としてのツールの開発は、円滑な運営には欠かせないが、ここで実践されているものは、今後の他大学のモデルとなることが予想されるものである。

学内支援、協力体制としては、留学派遣、受け入れの諸手続きに関しては国際部、そして広報課による学内外への積極的な広報活動が行われている。また、教育開発支援課の協力によって学生到達度アンケートを実施する他、キャリアオフィスの支援による企業訪問、インターンシップなどが企画されている。また、学部内の教学体としては、東洋研究学域、日本史研究学域、心理学域、京都学専攻、言語コミュニケーション専攻などの教員が東アジア文化・日本文化・京都文化・異文化理解などの授業を行い、また学内の様々な学習プログラムの開発に相互に協力している。

(優れている理由)

学内の様々な部署が専門的な事項を担当し、全学的な支援体制、協力体制が構築されていることは優れている。

教員体制としてはプログラムマネージャーとしての日本人教員と外国人教員 2 人（韓国担当、中国担当）を採用し、移動キャンパス中の講義の他、留学生活におけるリスク管理などにも注意を払っている。

(優れている理由)

リスク管理に十分に配慮する体制が構築できている点は優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

日韓中における各政府の支援規模の差が著しいため、三大学でバランスの良い体制を設計するのに困難が生じる場合がある。

○コメント

- ・ 将来的には、自立してプログラムを運営していく必要があると思われるので、政府の支援とは別の、長年の 3 大学間の交流・連携実績に基づいた自主的な努力も期待したい。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

本プログラムのために、カリキュラム中の語学や演習の構成割合を統一し、プログラム専用の授業を新規に開発することにより、一貫したカリキュラム内容となっている。歴史教育においては、各国の高校で使う歴史教科書を使い、多様な歴史認識を知るための工夫を行っている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムでは、通常の交換留学のように現地の大学にある既存の授業を履修するのではなく、本プログラムのために三大学が開発した授業を履修する。学生の語学レベルなどを鑑みながら授業の内容や方法を三大学で調整することで、「移動キャンパス」を通じて一貫したカリキュラムとなった。

(優れている理由)

3大学が協力して新規に科目を開発するのは、本プログラムの教育目標の達成に向けた意欲的な取り組みであり、特に優れている。また、語学レベルへの配慮の点では、キャンパス・アジアに参加するための候補学生を前年度に募集し、半年間の外国語学習を経て最終的な派遣生を決めている。中韓での日本語学習状況把握のためには、現地で使用している日本語教科書を入手し、参考としている。

移動キャンパスのカリキュラムに関しては、3大学が語学授業と人文系演習授業の割合を統一し、各大学での各授業を設置した。

(優れている理由)

参加3大学において、授業内容の調整が図られ、統一した割合での授業設置が行われていることは優れている。

移動キャンパス前の24年度は、立命館大学では人文学的素養を養うために演習授業を行い、相互討論、プレゼンテーションスキル、グローバルな環境における相互理解などを学び、移動キャンパスに向け、学生の現地適応力強化に努めた。

(優れている理由)

派遣学生に対して、語学授業以外にも、移動キャンパス前に知識・スキルの習得を行っており、現地適応力強化のための配慮が十分に行われたことは優れた取り組みであり、他大学の参考になる。

本プログラムの目的「次世代の人文学リーダー育成」にもっとも合致する授業として、各国の歴史を各国の言語で学ぶ授業を設けた。「キャンパス・アジア特殊講義日本史入門」「中外交流史の理解」「韓国史の理解」の3つの授業は、それぞれの大学が運営責任を持つ通年授業として、1年目の「移動キャンパス」を通して履修する。各国の歴史が各国の学校教育でどのように教えられているのか、互いに理解を深め、多様な歴史認識を知ることが目的として、各国の現地での対面授業と遠隔システムを利用して行われている。

(優れている理由)

歴史教育は多様な歴史認識を知る上で、重要な入り口となるところから、これをカリキュラムの重要な一環としたのは優れている。歴史の授業では、各国の高校で使っている歴史の教科書を使って日中韓の歴史を学んでおり、各国の立場をお互いに学ぶ方法として優れている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 本プログラムの教育目標達成に向けて種々の取り組みが見られ、特に優れている。
- ・ 歴史教育を専用授業として設置したのは、お互いの差異を明示する上では、限られた時間内で行うプログラムとしては有効な取り組みであると考え。語学以外にバランスを取るための新たな授業の取り組みも、モデル形成としては重要と思われるところから引き続きその開発を検討されたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

大学入学時期が、日本4月、韓国3月、中国9月と異なるため、とくに語学学習の進捗において各国学生間に差がある。どのように解決するか課題としてある。

○コメント

- ・ 「移動キャンパス」という新たな取り組みだけに、課題の解決に工夫を期待したい。語学の初修者には、とくに差があることは否めない。入学時期の半年のずれは、2年生や3年生でも差を埋めるのは容易ではないと思われる。語学の補習の強化をどこで組むのかがポイントとなるだろう。
- ・ ギャップイヤー的な制度の活用によるプログラム開始の統一や、長期休暇を利用した集中講座等の取り組みなどもあるのではないかな。そのような工夫事例自体を残していただきたい。
- ・ たとえば派遣するホーム大学が配慮するようにしてはどうか。
- ・ すでに実施されている学生の語学レベルを考慮した授業内容や内容の工夫が有効であると考え。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

学習支援では、参加大学間で教員派遣を実施するなど、移動キャンパスで学生をサポートする体制を用意している。共同シラバスの作成、ラーニングアグリメントの発行など本プログラムの教育の共同性を担保するための取り組みが進んでおり、統一した Web 履修管理システムを構築している点も優れている。生活支援では、共同学生宿舎（シェアハウス）として、学生が共に生活する環境が整備され、相互理解と将来の人脈形成にきわめて有意義な取り組みである。また、多様な情報発信や海外交流会との連携は優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

「移動キャンパス」の「日本史入門」授業を行うため、広東外語外貿大学に教員を派遣し、日本人学生のために中国語による授業の学習サポート、生活サポート、さらに中国の社会や文化に関する授業を行った。また、広東外語外貿大学の教職員と協力し、在広州日本国総領事館訪問や 1 泊 2 日のフィールドワークを実施した。各国歴史の授業には、学生が自分が履修していない自国史の授業にボランティアとして参加してサポートし、また予習・復習も学生間で協力して学習している。

(優れている理由)

教員の派遣によるフォローは重要であり、その体制が用意されているのは優れている。また、教育の共同性を担保する上でも優れた取り組みである。学生によるピアサポートは、学生自身の成長につながる良い取り組みである。

キャンパスアジアカフェでの語学カフェとランゲージエクスチェンジを日常的に運営することで、語学力の向上と本学で学ぶ留学生との交流を促している。

(優れている理由)

語学カフェは全学に開放されており、キャンパス・アジアの文学部の学部生（正規のキャンパス・アジア学生）以外にも、大学院生や一般留学生も利用しており、交流を図る機会として優れている。

三大学はカリキュラム、単位認定方法などについて入念に協議して共同のシラバスを作成し、それを学生に熟知させるために、本学文学部内の各専攻・学域で発行している「学びの手引き」を参考に、ラーニングアグリメント「プログラムの手引き」を発行した。学生選抜過程、プログラムスケジュール、カリキュラムの概要、科目一覧、卒業に必要な単位数・要件などが、一目瞭然となっている。共同運営の両大学にも配付し、好評を

得た。また、日韓中の3カ国語に対応したWeb履修管理システムを通じ、学生がどの国にいても履修登録、成績確認ができる。

(優れている理由)

カリキュラムが3大学で共有化され、シラバスが共同で作成されていることは教育の共同性を高めるうえで、優れた取り組みである。実際、科目表には本プログラムの教育課程が明快に示されている。さらに、ラーニングアグリメントとしての「プログラムの手引き」を3大学の学生に配布することで、3か国の学生に適切に情報を示し、学生のプログラムに対する理解を深めさせるとともに、学習の過程等を明確に自覚させている。また、Web履修管理システムを構築し、実際に学生が頻繁に活用していることは、今後の他大学のモデルともなりうる。

「学生共同宿舎」として2棟の建物（シェアハウス）を借り上げた。日韓中の学生が寝室、キッチン、リビングルーム、勉強部屋を共同で使用し、学習のみならず、生活面においても助け合いながら互いを理解してゆく。その宿舎は文化都市京都の中心部に位置しており、韓中の学生たちが現地に密着して社会や文化を理解することになる。3カ国の学生が共同学習・共同生活をすることで相互理解を深めてゆく。

(優れている理由)

3か国の学生が共同生活を行い、教室以外の場所でも交流を図るための環境を整備したことは、各国学生間の相互理解と将来の人脈形成にきわめて有意義な取り組みであり、プログラムの効果を上げる上でも重要な取り組みである。実際に視察した結果、シェアハウスでは、掃除・食事など生活上のルールを話し合いで決めていることや、学生が交代で買い物や夕食の支度を担当するなど学生が互いに助け合いながらの共同生活を送っており、効果的に機能していることがうかがえた。また、地域の活動にも参加しており、教育上有効である。

本学プログラムの活動と運営状況を発信するため、多様なツールを使用している（例：プログラム・ホームページのブログ、立命館大学の海外校友会と交流、学生ニュースレター「CAP」発行の支援）。

(優れている理由)

情報発信のために、さまざまなツールを活用していることは優れた取り組みである。中国における広州校友会との連携は、キャリア形成やプログラム参加学生のネットワーク化にも重要である。学生による自主的な情報発信のための機関誌CAPの発行は、学生の社会訓練としても有効であり、中国では学生が印刷業者と交渉して印刷・発行するなどしており、特に有意義である。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 本プログラム独自の新たな取り組みが随所に行われており、効果を期待したい。

- ・ 相手大学の海外校友会との交流が実現すると、人脈形成の幅がさらに広がり、より効果的と思われるところから、引き続き連携の輪が広がることを期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムは、学生たちがともに学習し、共に生活する方針で運営している。そのため日本滞在時に三カ国の学生の学習環境・生活環境がなるべく同一であることが望ましいと思われる。本プログラムの性格からすれば、韓国や中国の学生への支援だけでなく、日本人学生に対してもそれに準じる支援が必要になっている。

○コメント

- ・ 日本人学生への支援をどう組み込むのか、現在の規則のなかで工夫せざるを得ないのが現状だが、問題点の洗い出しとして、重要なポイントの指摘だと考える。
- ・ 京都で3か国の学生が共同で暮らす仕組みを作っているのであるから、それを活かす方向での検討をお願いしたい。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

互いの大学の単位制度や成績評価方式を尊重したうえで、科目認定の調整を事前に行うとともに、補講による授業時間数の調整を行い、また、Web 履修管理システムを整備して他国での成績が確認できるようにするなどの工夫をしている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

合同教職員会議や遠隔会議を通じて、人材育成目標に沿った移動キャンパス中の提供科目を事前にすり合わせ、他大学で履修した科目を出身大学の語学科目や専門科目として認定できるように調整をおこなった。また、各大学で単位認定基準が異なるため、出身大学で適切な単位認定ができるように補講の実施も含めた授業時間数等の調整もおこなった。それらの結果をラーニングアグリメントとして冊子「プログラムの手引き」に記載することで、受講生は他大学で履修した科目が本学でどのように位置づけられているのかを明確に知ることができ、また自身がどのような学問を修めたかを理解することでモチベーションの向上が図れるようになった。成績通知表や成績証明書にも本学の科目に読み替えて単位認定して記載できるようになっている。

(優れている理由)

参加大学間で、他大学での履修科目を、語学科目だけでなく専門科目としても認定できるよう調整を事前に行ったことは優れている。単位の互換性を高める工夫として「補講の実施も含めた授業時間数等の調整」を行っていることは今後の方向を示唆する工夫と言える。単位認定における各国の考え方の違いの調整は非常に難しいものであるが、それを補講の実施なども含めて真摯に解決しているところは非常に優れた取り組みであると言える。また、手引きにより学生に事前に明示したことも、制度設計として優れた取り組みと言える。

今回プログラム専用に開発した Web 履修管理システムでは、成績評価の参照だけでなく三大学の教職員がそれぞれに ID を持ち、セキュリティが守られた状態で、各国言語によってシラバス入稿・公開や、成績評価入力・公開をおこなうことができる。シラバスにおいては、三大学で協議の上、記載項目を共通とし、成績評価方法などを事前に学生に提示できる形態とした。また成績評価においては、各大学の評価基準に沿って、5 段階の絶対評価/百点満点の点数による相対評価/9 段階の相対評価でおこなうようになっている。Web 環境として構築し、成績評価は出身大学の成績発表時期に拠らず各学期の終了後に迅速に提示することすることで、学生たちがいつどの国に居てもシラバス参照や成績評価確認をおこなえる、円滑で透明性の高い履修管理の仕組みとなっている。

(優れている理由)

互いの大学の成績基準や評価システムを尊重する上で、この方法は良心的な取り組みとなっていると考えられる。成績評価方法を明確化し、事前に学生に提示したことは、学生に対する説明責任を果たす取り組みとして、きわめて有意義と考える。また、科目読替による単位認定では成績が「認定」としか記載されないが、学生は外国の大学での成績評価の結果を Web 履修管理システムで確認することができるようになっており、優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

三大学の学生は、Web 履修管理システムを使って各授業の開講大学から付与された詳細な成績を確認できる。しかし本学学生の成績表には、本学の「他大学等の開講科目の履修」の運用上、単位認定を示す「N (認定)」としか記載していないため、成績評価基準となる GPA に反映できず、学生の学習意欲に影響するという懸念がある。「本学において修得したもののみなす」ことを示す「N (認定)」表記ではなく、本学の通常評価と同じ 5 段階評価を適用することが今後の課題である。

○コメント

- ・ 海外で運用する科目で、5 段階評価を適用するためには、自校の教員を派遣し、相手校の教員との共同授業の形を取ることが考えられる。しかし、それでは相手キャンパスの中に入り、相手校の授業を受けることで異文化体験を十分に行ったことにはならない危険がある。また、形式的に共同授業の形を取るのも、モデル形成としては形骸化を招く恐れも考えられる。「移動キャンパス」を大学国際化の有効なシステムとして本格化するためには、成績担当者の基準を緩和する何らかの「規制緩和」が検討される段階に差し掛かっているように思われる。相手校の成績担当者を、自校の客員教員、兼任教員、非常勤講師に任命するなどの方策も、授業時間の調整の部分を共同授業と認定することも含めてありうるように思われる。
- ・ 評価・評点の互換をどうするか、認定をどうするか、はこれまで担当の先生あるいは学科等に任せてきており、原則やルールが存在していないのかもしれない。この課題は大学としての共通の課題であるので論点と問題点を整理することがまずは大切である。
- ・ プログラムとしての成績評価の基準の統一、互換性の確保は別途進行させておいてもらいたい。
- ・ 現段階では、各国の評価を尊重し相互に認定することになっているようだが、共同して運営するプログラムであるならば、さらに一步進んだ単位互換の仕組みが必要であり、学生にとっても、プログラム参加のメリットがさらに高まるものと思う。
- ・ 教育の質を参加大学間で共同で保証する仕組みを考案することが、本プログラムだけでな

[大学名：立命館大学]

く、日本の大学全体に問われていると考える。今後ジョイント・ディグリーなどで国外大学とのより密接な協力が求められるなかで、現地での授業視察が単位認定の前提のままであれば、こうした協力はきわめて難しい。学習成果を具体的に明示し、その達成を厳密にチェックする方向で、質の共同保証は考えられるのではないか。

基準 3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

語学能力について中国語、韓国語能力の検定試験を定期的に受験し、キャンパス・アジア以外の学生との比較分析を行っている。国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなど、教育プログラムの目指す人材像への到達を包括的に測定するアンケートを3か国で共同して作成・実施し、専門家による分析を行っているなど、学習成果を測定する新たな方法を共同開発していることは特に優れている。内部質保証との関係ともなるが、評価をプログラムの改善に活かす仕組みを整えることが今後、重要であり、期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

語学などの学習能力以外で、国際的なコミュニケーション能力・リーダーシップなど包括的な学生の到達度を定則的にはかるため、本学教育開発支援機構とともに本プログラムのための到達度アンケートを共同開発した。アンケートは中国語・韓国語に翻訳し、ウェブシステム上にアップして、三カ国同時に実施した。本アンケートは、年に1度実施し、4年間を通じての学生の到達度の検証が可能となるように設計した。また、回収したアンケートは専門家を通じて結果分析をして、各国学生の到達度を客観的に検証する。

(優れている理由)

測定の難しいコミュニケーション能力やリーダーシップを具体的に評価する仕組みを到達度アンケートとして構築したのは優れている。アンケート項目は、学生にキャンパス・アジアプログラムを通じて成長してほしい人物像を意図しており、学生と共通理解が醸成されるようになっている。また、3か国で共同開発したことは、3大学間の連携を図る上からも重要であり、毎年のアンケートの実施を通じて、プログラムをより効果的なものへと作り上げていくことが期待される。

語学学習の客観的な成果を見るために、日本で広くおこなわれている中国語、韓国語能力の検定試験を定期的に受験している。24年度4月に学習を開始した本学のプログラム参加学生8人が、11月の中国語検定試験（日本中国語検定協会）の4級に全員合格している。

(優れている理由)

検定試験を利用して、明確な形で学生の語学力を検証している。実際、キャンパス・アジアプログラムに参加していない学生と比較して、キャンパス・アジア学生の検定合格率は高く、教職員の予想をはるかに上回って、学生の語学力が上がってきているとのことであり、学習効果が得られている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 学習成果測定・把握のための取組みは他大学の範ともなるものであることから、例えば、到達度アンケートの項目や分析手法等の共有について検討していただきたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

学生の成長を把握するために、学習成果をグラフで表記し、管理する方法も検討している。韓国東西大学ではパイロット学生の選抜段階から学生の成績をグラフに作成して管理してきた。このような方法を三大学共通でシステム化できないか、検討中である。

到達度アンケートについては、24年度夏期のショートステイの前に試行版で実施し、その回答傾向を分析して修正した正規版を25年2月の移動キャンパス開始時に実施した。設問項目、回答方式（選択方式）などは、プログラムの目的や進捗、3カ国の学生の全体的な特徴（気質）を鑑みながら設定する必要があるため、試行版の実施と修正は必要であった。今後も数回実施して、プログラムの進展にともなう回答傾向の推移を見ながら、最終版を決定する予定である。

試行版の実施後に、韓国側からアンケートの内容をさらに学習効果が明確になるものにしてはという提案があった。本学としては、学習効果に関しては授業評価および上記語学試験等を中心に測り、到達度アンケートでは授業学習外の効果・行動や意識の変化を測るためのものとして作成していた。例えば予習や復習の時間、学業その他の生活スケジュール管理意識、集団や社会に対する意識、国際感覚などを測るものと位置付けていることを説明し、韓国側の理解を得た。このような学習に関するアンケートを実施する際に、その趣旨や意義について各国の教育に関する考え方の相違が出る場合があり、それを説明し、各国に理解を得る事前の対応が必要である。

本プログラムは大学4年間をかけたものであるので、現段階での成果は、あくまでも中途の段階のものでしかない。27年度末をもって正式な学習成果としたい。

○コメント

- ・ 学生の到達度アンケートについては、改善を繰り返してより完成度の高いものにする取り組みとして、きわめて有意義と考える。
- ・ 到達度アンケートは、このプログラムの評価システムの重要なポイントとなるものであり、その試行と修正自体が重要な実験とも言えるものとなろう。最終版の決定に至るプロセスそのものが、3大学の連携の試金石とも言え、すでに各国の理解を得る努力がなされており、この試みに期待したい。
- ・ 同一の評価システムであっても、国によって位置づけが異なるという指摘は貴重である。
- ・ 学生の学習成果を多面的に測定する試みとして意欲的な取り組みだと考える。
- ・ 学生を指導する上でも、また学生が学ぶ上でも見える化は有効である。
- ・ 韓国側の提案を受けて、新たなシステムの検討を行うというのは、3大学の連携の成果の一つと言えよう。

- ・ 連携プログラムの成果を検証する意味でも、今後のプログラムの改善のためにも、共同運営大学で共通のシステムを検討することは重要であると思われる。アンケート調査に関しても、3大学で共通の認識のもとでの実施が好ましいと思われる。
- ・ 参加大学間の意思疎通と調整に今後も万全を期していただきたい。
- ・ 4年間をかけて最終的に目指す人材像・アウトカムが得られるかどうかを求めるものであることは承知しているが、中間段階の KPI を明確化し、それをプログラムのモニタリング、改善に活かす仕組みが必要である。

※ KPI : Key Performance Indicator

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

学内運営委員会、学生からの意見聴取などプログラムの質を内部的に保証する手続きは、基本的なものは整っている。予定している外部評価の実施や、学生からの意見を反映する仕組みの構築、毎年のプログラムの進捗の有効性の確認と改善に活かす体制の構築などを更に期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

定期的実施している到達度アンケートの末尾に、学生たちが自由に意見や要望を書けるスペースを用意している。また学生たちが感じたプログラムの問題点を聞き取る機会を設けている。プログラムに対するさまざまな意見や感想、要望等が寄せられ、運営する教職員間で共有し、プログラムの運営に反映させている。

(優れている理由)

アンケートを活用することで学生の声をプログラムに活かす仕組みを取り入れ、PDCA サイクルの一部を機能させようとしている点は優れている。今後、外部評価委員会を設置することも予定しており、質保証についての3大学間の共同が進展しているようにうかがえる。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 学生からの要望等を、授業・プログラムの運営にフィードバックする具体的な仕組みがさらに整備されれば、きわめて有意義なものになると考える。